

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17448

研究課題名（和文）国際化時代におけるリテラシー教育モデル構築のための基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research for Developing a Literacy Education Model in the Age of Globalization

研究代表者

中井 悠加（Nakai, Yuka）

島根県立大学・人間文化学部・講師

研究者番号：40710736

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、言語を超えて詩創作教育学を構築するために、文献調査、リテラシー教育の国際化の可能性探究、日英共同による詩創作指導開発の3つの柱から検討を行った。文献調査ではおよびリテラシー教育の国際比較では、日本人学習者の閉じた感覚を開くことにつながる可能性を見だし、複数言語間の詩教育実践開発に向けた手がかりを得た。

日英共同による詩創作実践開発では、国際セミナー・ワークショップを開催し、自分の言葉表現に自覚的になること、発想の訓練によるアイデアの言語化、当事者意識・自立性の高まり、条件下での自由の行使による創造的リスク・テイキング、という日英の視点をつなぐキーワードを得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では国際比較の視点から調査を進めた。詩創作指導についてはすでに国内の国語科教育研究において多く取り組まれているが、これまで国際比較の視点から取り組まれたものは少ない。詩を使用して子どもたちのリテラシーを国際的な視点から高めようとしてきたことで、第一言語の教育として日本の国語教育学の立場から世界に発信し、交流基盤を構築することができた。

この国際化時代において、日英それぞれの国・単一言語の学びにとどまらない包括的な言語学習のあり方を考え、また実践的な交流を含めた日英比較国語教育研究の新しい第一歩を踏み出す可能性を持つ詩創作教育学研究として意義がある。

研究成果の概要（英文）：To develop a global poetry writing pedagogy, the present study was examined from three pillars: a literature review, an exploration of the possibilities of internationalizing literacy education, and the development of collaborative Japanese-English poetry writing workshop program.

I found the possibility of opening up the closed senses of Japanese students and obtained clues for the development of poetry teaching in multiple languages using pictures.

In the collaborative research between Japanese-English poetry writing, an international seminar-workshop on creative writing was held in 2017. The keywords that linked the perspectives of Japan and UK were: (1) becoming more conscious of own verbal expression, (2) verbalizing ideas through training of ideas, (3) increasing the awareness of ownership, (4) creative risk-taking through the exercise of freedom under certain conditions.

研究分野：教科教育

キーワード：詩創作 日英共同開発 国際比較

1. 研究開始当初の背景

国際化する社会の中で、「グローバル人材」を育成することが社会から求められている。産学連携によるグローバル人材育成推進会議(2011)においても、日本人としてのアイデンティティを持ちながらも異なる言語・文化・価値を乗り越えて関係を構築する能力、新しい価値を創造する能力などを育成する必要性が指摘されている。それは単純に国際言語である英語を身につけるなどの語学力の向上を意味するのではなく、相互理解・価値創造力・社会貢献意識などを携え、たえず変化し続ける世界に柔軟に対応していく力の育成を意味しているといえる。

このように、近年における世界規模の国際化は、情報技術の発展や交通手段の発達により自然発生的に発展しているだけに留まらず、各国政府が積極的に推進・関与しようとしていることに大きな特徴がある。中でも国の違いを問わず行き来しやすいのが「知」であり、「教育」はそれゆえに国境を越えた議論が盛んに行われている。特に人類共通の目標として策定された「国連持続可能な開発のための教育の10年(D-ESD)」は2014年に最終年度を迎え、世界が共通した目標に向かう教育の探究を続けてきた。そのため教育に関する様々な課題や価値は多くの国で共有され、また協同で課題を解決するために、それぞれの分野・教科で国際水準を確立しつつある。

しかし、わが国の国語科教育研究においては、教科内容である「言語」が違うことにより、他教科ほど容易に国際的な研究交流を行ってきたとは必ずしもいえるわけではない。近大教育の大きな柱のひとつが言語教育であったことを振り返ると、ことばの育成がいかに子どもたちの人間形成に貢献する機能を果たしてきたかということは忘れてはならない事実である(細川、2012)。先に挙げたESDにおいても言語教育の重要性は指摘されているにも関わらず、「国際化時代の言語教育」のあり方に関する研究は緒に就いたばかりであり、それゆえに確立した教育実践が展開されているとはいえない。「何をどのように教えるか」という効果的な教育技術・方法を模索する以前に、子どもたちにとっての彼ら自身の言語文化とその営みの価値を問うことは国際的な言語教育研究の喫緊の課題である。それは同時に、我が国における母語としての国語科教育のあり方を改めて問い直すことを意味している。

これまで、国語科教育における表現力育成に資する詩創作指導研究を展開する中で、詩を創作する時に生じる思考過程を十全にふまえた詩創作指導論が構築されてきていることが認められるイギリスの国語教育論に焦点を当ててきた。しかしこれらの研究においても、詩について「何をどのように教えるか」という効果的な授業方法の追求およびイギリスのみの議論の探究に留まっており、言語の違いという壁を乗り越える学習論を構築するには至っていない。特に詩という表現形式は、世界に共通してことばの特性を利用してその可能性を追求する原始的な表現であり、その表現力を育成することは世界を自分自身で意味づける・価値づけるというユニバーサルな権利としてのリテラシーの基礎として極めて重要な役割を担う。しかしイギリスにおいては、詩の文化的価値が強度に重要視されることによって詩創作が「知識と技術の表明」に留まり、そうした本来的な機能を果たしにくくなっているという課題を抱えていることも同時に見出ししてきた。

一方で、従来わが国の国語科教育論における詩の創作指導は「児童詩教育」として長い歴史と伝統を持っており、詩という形式で書くことによって子どもたちが彼らの生活を豊かにすることができる教育として独自に発展してきた。しかし、その教育観から、詩の創作指導は子どもの見えない心を理解する指導法や生活指導、学級経営の方法として使われ、国語科が担うべき「ことばの教育」とは距離のある領域として扱われてきた。そのため言語的な知識や技術は問われることがなく、逆に「何をどのように教えるか、何を学ぶか」という授業論・学習論とも距離を置いてきたことは事実である。それは同時に、国語科教育における詩創作指導の位置づけをも曖昧にする原因となり、またそれによって我が国の国語科教育研究は詩という原始的表現・人間のことばの獲得という国際的に共通する軸を見過ごしてきた。

このように、同じ「詩創作指導」であっても、言語が違うことによりその営みを共有することなく独自の成果と課題を抱えているという現状は一目瞭然であり、そこで用いられる言語の違いを超えて子どもたちの表現力を柱とした国際的に共通するリテラシー育成に資する詩教育の基礎論を改めて構築する必要性が浮き彫りとなった。

2. 研究の目的

以上の課題意識から本研究では、「思考に用いる言語」としての母語と表現された言語との関係を捉え、それらの構造の解明を通して、世界を意味づける・価値づけるというユニバーサルな権利としての国際的な指標を開発するための基礎理論を構築することとした。全く違うといっていほど言語体系も文法も異なる日本とヨーロッパの間において、世界中で「文学の発生」として共通して存在する詩を対象として、同じ「母語の教育」として比較研究を行うことは、その言語体系の違いを克服できる方法論を構築しようとするのが強く求められる。それは却って、言語の別を問わない学習モデルとして同定することを可能にし、日本の国語教育論としても国際的なリテラシー教育論としても重要な学習の開発を行うことを意味する。本研究は、これまで行ってきた研究を土台として、比較国語教育論へと発展させ、それに基づく議論を国際的に展開するための足がかりとなることを目指した。

3. 研究の方法

〔文献調査〕

まず、子どもたちのリテラシー育成にとって詩教育が果たす役割と教育としての姿について国内外の資料・情報収集を行った。国外では、2つの英語圏である英国およびニュージーランドの国家カリキュラムおよび試験（GCSE、NCEA）における詩の位置づけを探った。国内では、日本における詩創作指導の基礎調査として、大正時代からの児童詩教育論および小学校国語科における現行教科書の詩創作単元を整理した。

〔リテラシー教育の国際化・学際化の可能性探究〕

英語を母語としないノルウェーと日本の国家カリキュラム（日本のものは学習指導要領）における国語/英語、Norwegian/Englishの特徴について比較考察を行った。さらに、複数の言語をつなぐ手がかりとして絵に着目し、絵を媒材として子どもたちと文学の出会いの場となる絵本について、読者反応理論に基づく日本の絵本の特徴を分析した。同時に、言語の違いを問わないリテラシー育成に資する指導法を探る手がかりのひとつとして、詩と絵を連動させて子どもたちから「ことばを引き出す」実践を開発し、小学校教員養成課程の大学生を対象として実施した。

〔日英共同による詩創作実践開発〕

英国を中心として国際的に詩教育研究を牽引する Sue Dymoke（スー・ディモク）准教授（レスター大学・現ノッティンガムトレント大学）と共同で教員志望学生や研究者、現場教師を対象とした詩創作ワークショップを開発・実践し、質問紙調査により参加者の経験の質を分析した。さらに、英国において Carter が開発し Dymoke が発展させた評価フレームワーク（Dymoke 2003, 中井, 2013）を使用し、日本の中学生によって書かれた詩を英国で作成された評価指標によって評価する作業を試み、日本においても使用することが可能な形への再構築を試みた。

4. 研究成果

〔文献調査〕

日本の児童詩教育の課題について、その理論的な対立構造、実際の学校教育との関連、国語教科書の特徴を手がかりとして考察した結果大きく5点に整理した。（1）作品主義から脱却し、子どもたちが何を学び何に迷っているのかということ教師側が今一度認識しなおす必要があること（2）子どもたちの言語的発達の様相をより詳細に明らかにし、精緻化した上でカリキュラム構築を構築すること（3）子どもがひとりで自分の才能を頼って進めていく行為ではなく、そこで共に書き合うクラスメイトの存在、さらに教師自身の存在の重要性を再認識し、特に教師がその場においてどのような役割を担っていくのかという教室の社会的機能をふまえた指導法を解明すること（4）ことばの機能と「想像力」の連関構造を解明すること（5）子どもたちの生活経験・言語経験の時代的変容を認識し、ことばそのものを対象とする児童詩教育の方法と意義を解明・体系化すること、である。それに対して、英国およびニュージーランドでは、言語教育におけるアイデンティティと子どもたちの表現力との関係が強調された詩教育カリキュラムが構築されていることを捉えた。

〔リテラシー教育の国際化・学際化の可能性探究〕

ノルウェーと日本の言語教育にまつわる4つのカリキュラムを比較した結果、ノルウェー語の教育においては、歴史的・国際的視点から現代ノルウェー語の位置を知ることの重きを置いていた。特に、国際世界とノルウェー語、ノルウェー文化や歴史との影響関係を学ぶことも重視されている。それらを達成するための言語力の育成と位置づけられる。日本の国語では、言語力の育成が重視された。日本の言語文化という歴史的な視点が取り入れられ、中国古典である漢文も含まれる。一方現代の国際社会と日本語との影響関係は薄い。ノルウェーの「英語」は英語や英語の世界（国際市場、高等教育など）に焦点が当てられる。日本の英語教育はコミュニケーション能力の伸長を重視して日本語との比較に焦点が当てられていた。4つの言語教育を概観すると、日本の国語教育だけが他言語と切り離されているような位置づけとなっている。日本の言語教育カリキュラムでも、日本語を自分の母国語として認識し、それを異言語理解へと転化させていく力を身につけるためには、「日本社会で日本語のみを使う」という概念を砕く必要があると考えた。そこで英語と日本語を往還する俳句アンソロジーを教員養成課程の学生を対象として実施し、母国語を「国際的・歴史的な視点」から捉える母語教育を実践することが日本人学生の閉じた感覚を開くことにつながる可能性を見いだした。

次に、複数の言葉を媒介するものとして絵の存在に着目し、絵と言葉が織りなす力学（ニコラエヴァ、スコット 2011）と読者を考慮に入れることのできる形で絵本の再分類を試みた。大きく絵画的特徴（印象、線、色、質感、表紙の顔）、言葉と絵の連動関係、没頭可能性の3項目に分けられる21種類の評定項目を使用して絵本をクラスター分析した結果、3つのクラスターに分類でき、テーマ別・話題別で分類されることが主流であった絵本を絵画性をより前面に出して強調する形で分類する視座を得た。さらに、その力学から発想を得て、絵と言葉を読み解き意味を生成・表現する主体としての子どもの姿を立ち上がらせるための実践可能性を探った。そのために、詩が持つ「耳と目の両方に語りかける」（Benton, 1988:22）という性質に着目し、パウル・クレーの「階段の上の子供」およびその絵に着想を得た谷川俊太郎の同タイトルの詩を、目を通した知覚行為で結ぶ実践を試みた。学習者のワークシートおよび振り返りのコメントを分析し、

「目で捉える」ことによって多角的に解釈が広がる可能性を見出した。しかし、そうした視覚的特徴を意識しすぎたことが、詩の特性を形作るもうひとつの側面である「耳で捉える」ことをおろそかにし、絵と詩に対する浸り込み(engagement)を妨げる原因となっている課題が見出され、詩のマルチモーダルな特性をより強調する結果となった。このように絵を介した詩教育の実践は国際学会において発表を行い、まったく言語が違う場においてもそれぞれの母語教育の議論を可能にすることを確認することができ、この成果はひとつの手がかりとなった。

〔日英共同による詩創作実践開発〕

Sue Dymoke 准教授(レスター大学)およびヤングアダルト小説家である David Belbin(ディビッド・ベルピン)上級講師(ノッティンガムトレント大学)を招聘し、詩と物語創作のためのワークショップおよび研究セミナーを開催した。Dymoke 准教授と共同開発の上実施されたクリエイティブ・ライティングおよび詩創作ワークショップでは、主に教員志望学生や研究者、現場教師を対象とし、参加者のアンケートからは創作指導の授業開発にむけた理解が深まったとの回答を得た。

そのうち詩創作ワークショップにおいて行った質問紙調査の結果を分析し、日英共同で詩創作の学習指導開発を進めるための手がかりを得るための探索的な検討を行った。英国の視点から見た時、本考察によって自国の創作手法が日本という他文化・他言語の集団において持つインパクトを見て取ることができた。日本の視点から見た時、新しい形の詩創作指導法に触れ、かつその中で生じる学びの様相を垣間見ることができた。日英の視点をつなぐキーワードとして、「言葉(word)」、「自由(free)」、「発想(idea)」、「自分(self, I, my)」を導出し、それぞれで見出される学びの可能性として次の4つを捉えた。

自分の言葉表現に自覚的になること

発想の訓練によるアイデアの言語化

当事者意識・自立性の高まり

条件下での自由の行使による創造的リスク・テイキング

それぞれの中で実体としてあらわれた学びを、いかに効果的に実現することができるかということを中心として、教材を開発していくことが求められる。この国際化時代において、日英それぞれの国・単一言語の学びにとどまらない包括的な言語学習のあり方を考え、また実践的な交流を含めた日英比較国語教育研究の新しい第一歩を踏み出す可能性を持つ詩創作教育学研究として意義のある成果を見出した。このワークショップにおける導入・記述・交流の展開方法に基づき、参加者によるアンケートの記述をふまえた上で、日・英両言語によるウェブ教材として広く公開した。

最後に、学習者の書いた作品を評価するための日英共通の評価指標の構築にむけた考察を進めた。Dymoke(2003)の評価フレームワーク(注・中井(2013)において訳出・引用されている)を使用し、独立した評定者が74編の詩それぞれを評定した。9%という極めて低い評定者間の一致率に注目し、詩を評価するための「語彙」が共有されていないことを改めて確認することとなった。詩と評価コメントを分類するためにそれぞれの独立した評定と調整・決定した評定に基づいて、74の詩への評価コメントを群平均法によりクラスタ分析(cohesive r=.690)を行った。デンドログラムの特徴に基づき、その解釈のしやすさから、8クラスタ解を採用した。評定者間および調整した評定値に差がない1, 4, 5, 7クラスタ以外のクラスタ(2, 3, 6, 8クラスタ)で理解に相違が表れた語彙を抽出した。

中学生の詩を再評価しながら語彙の解釈を行い、フレームワークに含まれた2つの要素(想像力、詩的形式)を解体し、さらに使用されている語句をこの作業の中で解釈し直した語句におきかえた。しかし、もともとのフレームワークが英国のGCSE(義務教育終了時に受ける中等教育修了一般資格試験)の作文評価のためのフレームワークを参照して作成されていることを踏まえると、日本においてもこれまで蓄積されてきた評価の語彙を整理した上で両者を付き合わせる作業が必要であった。

細かいレベルの再検討が必要となったものの、この考察において、「想像力」と「詩的形式」の二つの要素に解体したことは、子どもの詩を見る視点を改めて構造化することを意味している。その知見に1人の日本の小学生によって6年間にわたって書かれた詩集の解説を執筆した。学年が上がるにつれて、身近なものを变形させる(想像力起点)の地点から言葉そのものへ視点が変化していること(詩的形式起点)をつきとめ、2つの角度から詩を見るのが書く力が発達する道筋を示す可能性を示した。

引用文献

- ・ 文部科学省(2011)「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf (2020年6月12日最終閲覧)
- ・ Dymoke, S(2003), *Drafting and Assessing Poetry*, Paul Chapman Publishing
- ・ 中井悠加(2013)「S.Dymokeの詩創作指導の理論と方法—下書きと評価を中心に—」『国語科教育』第73集 pp.31-38
- ・ マリア・ニコラエヴァ、キャロル・スコット著/川端有子・南隆太訳(2011)『絵本の力学』玉川大学出版
- ・ Benton, M., Benton, P.(1988), *Young Readers Responding to Poems*, Routledge

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中井悠加	4. 巻 1
2. 論文標題 小学校国語科における児童詩教育の課題と展望 : 歴史的変遷と教科書教材の検討から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間と文化	6. 最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中井悠加・Sue Dymoke	4. 巻 61
2. 論文標題 国際化時代における詩創作教育学に関する日英共同研究 : 詩創作ワークショップ実践の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 読書科学	6. 最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.19011/sor.61.2_97	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yuka Nakai
2. 発表標題 Globalization and education: Comparative perspectives on connections and contradictions in language education
3. 学会等名 UKLA 53rd International Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoichiro Nonaka, Yuka Nakai
2. 発表標題 An exploratory study on picture-books in early childhood care and education environments (1): Skills of selecting and displaying picture-books based on preschool teachers' practical knowledge
3. 学会等名 EECERA Conference 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuka Nakai, Yoichiro Nonaka
2. 発表標題 An exploratory study on picture-books in early childhood care and education environments (2): A classification of picture-books based on artistic features using reader-response theory
3. 学会等名 EECERA Conference 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuka Nakai, Satoshi Higuchi
2. 発表標題 Aesthetics for Children: Reading Poetry and Painting
3. 学会等名 International Conference on Philosophy for Children (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuka Nakai, Masafumi Ikeda
2. 発表標題 An exploratory consideration of approaches to assessing children's poetry: How do we view poetry written by secondary school students?
3. 学会等名 21st European Conference on Literacy
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 浜本純逸 (監修)、武藤清吾 (編集)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 278
3. 書名 中学校・高等学校 文学創作の学習指導 実践史をふまえて (ことばの授業づくりハンドブック)	

1. 著者名 風早結奏, 三藤恭弘, 中井悠加	4. 発行年 2018年
2. 出版社 デザインエッグ社	5. 総ページ数 102 (pp. 85-95)
3. 書名 虹色のカノン	

1. 著者名 白坂 洋一・香月 正登 編著 / 「子どもの論理」で創る国語授業研究会 著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 168
3. 書名 「子どもの論理」で創る国語の授業 書くこと	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>〔国際シンポジウム〕 詩と物語創作のためのセミナー・ワークショップ：21世紀の詩教育学構築をめざした日英比較研究（於：広島大学）、2017年</p> <p>〔ウェブサイト〕 Poetry writing resources for Japanese Teachers https://suedymokeypoetry.com/poetry-writing-resources-for-japanese-teachers/</p> <p>〔講演〕 中井悠加「イギリスの詩創作指導について：日英比較と詩創作の発達」中国・国語教育探究の会 冬期研修会、2019年</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考